国

問

# 国　語　二十四年度

注　意

(1) 「解答はじめ」というまで開いてはいけない。

(2) 問題は一冊(本文九ページ、下書用紙は一枚)、解答用紙は三枚である。下書用紙は問題冊子の中にはさみこんであるので引き抜いて使ってよい。

(3) 全部の解答用紙に受験番号を書くこと。受験番号は次の要領で明確に記入すること。

(例)　受験番号 50001 番の場合

| 5 | 0 | 0 | 0 | 1 |
|---|---|---|---|---|

(4) 解答は解答用紙の所定の位置に書くこと。他の所に書くと無効になることがある。字数などの指示がある場合は、その指示に従って書くこと。解答は縦書きとする。

(5) 解答用紙の余白は採点者が使用するので、誤字脱字の訂正のほかは使ってはいけない。

(6) 書き損じても、かわりの用紙は交付しない。

(7) 試験終了後、問題冊子と下書用紙は持ち帰ること。

**問題一**　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

歴史上に存在する思想家というものを今日から見て評価するしかたにはいろいろあります。たとえば、その歴史家の生きていた時代の状況というものをまったく捨象あるいは無視してしまって、その思想家が一個の人間として、人生の永遠不変な課題に対して、あるいはわれわれが日常どこでも当面する問題に対して、どう対処し、いかに答えているか、というような観点から取り扱うこともできます。それから、逆に、その思想家を、きょうのテーマで申しますならば、佐久間象山なら象山を、どこまでも特定の、つまり一回かぎりでくりかえさない歴史的な状況のなかに置いて、象山の思想というものが、そのときの歴史的な諸条件のなかで、どういうふうに位置づけられるか、どういう歴史的役割を果たしあるいはA セイヤクを負っているのか、そういうことを明らかにするしかたもあります。こういった思想家に対するアプローチのしかたは、抽象的にどれがよくてどれが悪いというものではありません。それぞれに意味があると思います。

ただ、前者のようなやりかた、つまり、時代を捨象して、どの時代にも変わらない人間の精神や心理の動きかたに着目して、その思想家の人間像を描き、あるいは彼の課題を普遍的な思想課題として追究するというアプローチは、ややもすると、自ら意識しないで、現代人の心理感情を直接に歴史的人物にB トウエイしたり、あるいはその思想家が万人の認めるところ象山のような偉人である場合には、研究者自身の理想的人間像を対象と同一化して、彼をいわばスーパーマンに仕立て上げることになりかねません。

しかし、逆に、第二の解明のしかた、つまり象山の思想を徹底的に特殊的な、一回的な歴史的な状況だけから説明していきますと、同じ歴史的条件は二度とくりかえされませんから、その思想家から、現代に生きるわれわれが何を学ぶかという問題が出てこなくなります。結論は、象山は偉かったが、こういう歴史的限界があったということでおしまいになる。それだけではありません。よく歴史的人物論の最後には、「ア ひっきょう彼も時代の子であった」というように書いてあります。時代の子であったといえば、象山も時代の子であれば、藤田東湖も時代の子であり、同じ時代の山奥に住んでいた何の何兵衛もやはり時代の子であります。時代の子であったということは、実は何も言わないに等しいわけであります。時代の子とか、あるいはもっと特殊化して下級

藩士の出身だとかいってみたところで、やはり下級藩士はたくさんいたのですから、そういった特定時代の共通項でくくるだけでは、その思想家の思想的個性をつかまえることはできないと思います。

特に、今日われわれが過去の思想をみるという場合に、われわれはきわめて安全な地帯から、気やすく過去の思想を判断したり裁いたりすることができます。今日常識化した価値の基準、今日ではだれも当然と思っているものの考え方に安心して、よりかかった姿勢で過去の思想というものを扱う、そして思想家の時代的な限界を指摘することができます。こういう考え方にたちますと、いかなる過去の思想家についても今日のわれわれの目から見まして「限界」を指摘することは容易であります。一見これと反対に、象山は偉かった、彼は非常な先覚者であった、という評価を下す場合にも、彼は先覚者であったということは、やはり今日の常識です。象山の思想の解釈のしかたではいろいろ見解は分かれていても、先覚者でなかったという人はまずありません。ということは、その限りにおいては評価が一定しているということです。評価の一定した時点から、安心して、象山は先覚者であったにもかかわらず、当時の狂信的な攘夷論者はその偉さがわからずに彼を殺してしまった、惜しいことをした、と言います。これはやはり今日われわれが到達した歴史的時点によりかかって、わからず屋に殺されて惜しい先覚者を失った、さあ没後百年のお祭りをしましょう、と言っているだけであります。これも、安易なことだと思います。

つまり、われわれがすでに今日までに到達した知識と、われわれが立っているところの道徳的な基準、政治的な価値、そういったものを当然の、C ジメイの前提として歴史的な過去を見ますと、ほめる場合にも、当時にしては広い視野と展望をもっていた、たとえば外国を夷狄夷狄と呼んではいけないといったのは、あの時代としては偉かった、というほめかたになる。ですから、それを裏返せば、一同じ論理で、今日から見たら限界があったということになるのであります。

こういう見方で、過去の思想から今日われわれが学ぶということができるでありましょうか。私は多少それを疑問といたします。では過去の思想から今日われわれが学ぶということはどういうことなのか。歴史的状況をまったく無視せずに、しかもその思想を今日の時点において生かすということはどういうことなのか。そういうことを私たちはもう少し考えてみたいと思うわけであります。

百年もまえに生きた思想家を今日の時点で学ぶためには、まず第一に、現在われわれが到達している知識、あるいは現在使っていることば、さらにそれが前提としている価値基準、そういったものをいったんかっこの中に入れて、できるだけ、その当時の状況に、つまりその当時のことばの使い方に、その当時の価値基準に、われわれ自身を置いてみる、という想像上の操作が必要です。今日から見れば象山没後の百年の間に日本はどういう道を歩んでいったか、世界はどういうふうに発展していったか、ということは既知であります。しかし百年前の象山が行動していたその時点においてはまったく未知であります。ちょうど、われわれは、これからさき百年後に日本はどうなるか、世界はどうなるか、まったく未知であるのと同じことです。つまり、いま申した歴史的想像力をD クシした操作というのは、今日から見てわかっている結末を、どうなるかわからないという未知の混沌に還元し、歴史的には既定となったコースをさまざまの可能性をはらんでいた地点にひきもどして、その中にわれわれ自身を置いてみる、ということです。簡単にいえば、これが過去の追体験ということであります。

しかし追体験だけでは、過去を過去から理解する、いわゆる過去の内在的理解が可能になる、あるいはいっそう深くなるというだけです。次には、その思想家の生きていた歴史的な状況というものを、特殊的な一回的な、つまりある時ある所で一度かぎり起こったできごととして考えないで、これを一つの、あるいはいくつかの「典型的な状況」にまで抽象化していく操作が必要になります。あらゆる歴史的できごとというものはそのままではくりかえされません。が、これを典型的な状況としてみれば、それは、今日でも、あるいは今後もわれわれが当面する可能性をもったものとしてとらえることができます。

もちろん関心のE ショザイによって、典型的状況を抽出するしかたはさまざまありうるわけです。かりに政治的リーダーシップのあり方という点に関心を持てば、小国が諸大国にかこまれて彼らの野心を操縦しながら自分の国の保全と独立を図らなければならない「状況」とか、国内政治でいえば、重臣が伝統的な権威をイ かさに着て、しかも相互に暗闘をつづけている「状況」とか、あるいは知識人が時代に愛想をつかして社会的政治的関心を失い隠遁している「状況」とか、その他いろいろな「型」が抽出されるでしょう。たとえばマキアヴェルリはこういう操作をローマ史について行なった。そこで千何百年も前の状況と、その中でのさまざまな人間の政治行動とが、マキアヴェルリの生きていたルネッサンス時代に「生かされ」たわけです。彼の政治法則は、こうして、歴史を過

去に固着させず、さりとて、歴史的な人物の行動をまったく自由勝手にその時代からひきはなしもしないで、状況とそれに対する対応とをさまざまの「型」に形成していったところにできたものです。こういう操作で、歴史的過去は、直接に現在化されるのではなくて、どこまでも過去を媒介として現在化されます。思想家が当時のことばと、当時の価値基準で語ったことを、彼が当面していた問題は何であったか、という観点からあらためて捉えなおし、それを、当時の歴史的状況との関連において、今日の、あるいは明日の時代に読みかえることによって、われわれは、その思想家の当面した問題をわれわれの問題として主体的に受けとめることができるのです。

――丸山真男『忠誠と反逆』

問い一　傍線A・B・……・Eのカタカナを漢字に改めなさい。

問い二　傍線ア「ひっきょう」・傍線イ「かさに着て」の意味を簡潔に書きなさい。

問い三　傍線一「同じ論理」の指す内容を簡潔に答えなさい（三〇字以内）。

問い四　傍線二「過去の内在的理解」とはどういうことか、簡潔に答えなさい（三〇字以内）。

問い五　傍線三「過去を媒介として現在化」するとはどうすることか、簡潔に答えなさい（四〇字以内）。

**問題二**　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

問ふ。古今世を捨てたる墨染の人として、恋の歌詠めること、挙げて数ふべからず。また憚ることもせざるは何事ぞや。色欲は殊に深き仏の戒め、あるまじきことの第一なり。しかるを僧の恋歌詠めるも甚だ賞す。遍昭僧正の類ひ、ことに歌道に名高し。かかる不道心の僧をいかで賞美するや。憎むべきことにあらずや。

答へて曰く、これ何事ぞや。先にも委しくいへるごとく、歌は思ふことを程よくいひ出づる物なり。心に思ふことは、善悪に関はらず、詠み出づるものなり。されば心に思ふ色欲を詠み出でたる、何の事かあらん。その歌よろしく出で来たらば、これまたなんぞ美賞せざらんや。優れたる歌ならば、僧俗選ぶべきにあらず。一その行跡の善し悪し、心の邪正美悪は、その道その道にて褒貶議論すべきことなり。歌の道にて、とかく論ずべきにあらず。この道にては、ただその歌の善悪をこそいふべきことなれ。二僧なれば恋の歌詠むまじき理なりなど、なんぞ由なき議論をなすべき。その上すべて出家とさへいへば、みな心まで仏菩薩のごときものぞと心得たるか。僧の少し好色がましきことあれば、人甚だこれを悪むこと、俗人と雲泥の如く、大悪のやうに思へり。まことに世尊の上なき戒め、輪廻妄執の絆、これに過ぎたることなければ、僧としては、もとも厭ひ避くべきことなれども、僧とてもと俗人と変はりたる性質にあらず。もと同じ凡夫なれば、三人情に変はりたることはなきはずなり。万人の同じくこのむ声色なれば、独り出家の好むまじき道理はなきことなり。

心に思ひ願ふことは変はらねども、出家したる上は、克レ己随分慎み避くべきはもとよりのことなり。しかるを、僧なれば心に色を思ふをも憎み疎むは、四人情を知らぬ心なり。世尊の深く戒めたまふも、人ごとに離れがたき物なるゆゑなり。その戒めの厳しきを以ても、この事の避け捨てがたき程を知るべし。されば僧などは、いかにも慎み遠ざけて、恋すまじきものなれば、いよいよ心には思ひむすぼれて、情の積鬱すべき理なれば(この心なきは岩木のたぐひなり)、せめて思ひを和歌に晴らさんこと、いと哀なることにあらずや。されば優れたる恋歌も、俗人よりは出でくべきなり。しかるを今の世の歌よむ僧も、恋の歌憚りて詠まず。また歌詠むに限らず、すべて僧の、色欲ごとは、少しも心に思ひ懸けぬやうにみせ慎む。これ今の世の僧俗ともに偽り多く、心得悪

しきなり。僧とてなんぞ心には色を思はざらんや。これにつけても、昔の人は、正直質朴にして、偽り飾ることの少なかりしこと知るべし。

―本居宣長『排蘆小船』

問い一　傍線一「その行跡の善し悪し、心の邪正美悪は、その道その道にて褒貶議論すべきことなり。」とはどういうことか。文脈に則して述べなさい（五〇字以内）。

問い二　傍線二「僧なれば恋の歌詠むまじき理なりなど、なんぞ由なき議論をなすべき。」を現代語に訳しなさい。

問い三　傍線三「人情」はここではどのような意味か述べなさい。

**問題三**　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

先日、「外国語教育と異文化理解」というテーマでのシンポジウムで、「目標文化」というあまりなじみのない言葉を聞いた。「目標文化」というのは、私たちがある外国語を学ぶとき、その学習を通じてめざす文化のことである。フランス語を学ぶ場合、フランス語は「目標言語」、フランス文化は「目標文化」と呼ばれる。

という説明を聞いたとき、何か強い違和感を覚えた。発表者は「目標文化に到達するためには、目標言語による教育が必須である」というネイティヴの教師が強く主張する教育観を取り上げて、それに対する疑念を語っていた。

私もそれに頷(うなず)いた。苦い経験があるからである。二十年ほど前、ある語学学校で、フランスのテレビの「お笑い番組」のビデオを見せられて、早口のギャグの聴き取りを命じられた。私がその課題を拒否して、「私はこのような聴き取り能力の習得には関心がない」と告げたところ、教師は激怒して、「市井のフランス人が現に話しているコロキアル(注)な言葉が理解できない人間はフランス文化をついに理解できないであろう」と述べた。彼女の予言は正しかったことが後にわかるのだけれど、そのとき私がこのフランス人教師と意見が対立したのは、私と彼女が「フランス文化とはこういうものだ」と思い込んでいたのが同じではなかったからである。

私がフランス語の習得を志したのは、六〇年代の知的なイノベーション(注)の過半がフランス語話者によってなされているように見えたからである。サルトル、カミュ、レヴィ＝ストロース、フーコー、ラカン、バルト、デリダ、レヴィナスたちの仕事はこの時期に集中しており、彼らの最新の知見にアクセスするためにフランス語運用能力は必須と思われた。私はこの「知的饗宴(きょうえん)」を欲望してフランス語を学び始めたのであって、市井のフランス人に特段の興味があったわけではない(今もない)。

だから、目標文化は、必ずしもある国語を母語とする人たちの「国民文化」を意味しない。例えば、聖書の原典はヘブライ語やアラム語やコイネー(注)で書かれているが、それらを母語とする話者たちはもう存在しない。だからといって、聖書を生み出した文化について真の理解に達することはもはや誰にもできないと主張する人はいない。誰もそれを母語としない言語にも固有の文化というものがありうる。

私は実は今の世界における英語というのが「誰もそれを母語としない言語」ではないかと思っている。それは英語が国際共通語、リンガ・フランカ(注)だという意味ではない。国際共通語というのは「いかなる国民文化からも自立した、中立的なコミュニケーション・ツール」というふうに定義されるのだろうが、英語はそうではない。英語話者たちもまたある「種族の文化」をめざしてはいるのである。ただ、その「種族」は近代国家論的な枠組みでの国民国家ではないということである。

「英語ができる人」がアメリカ文化やイギリス文化やカナダ文化やニュージーランド文化について造詣が深いということはない。大学の英文学科に進学する高校生たちが書く志望理由のほとんどは「英語を生かした職業に就きたい」というものである。彼らは卒業後に例えば香港の航空会社やドバイのホテルに就職する。中国文化やアラビア半島の文化に興味があってそうしたいと思う人はいないだろう。

少し似た状況が六〇―七〇年代にもあった。この時期、理系で履修者が一番多かった第二外国語は意外なことにロシア語である。それは一九五〇―六〇年代にソ連が宇宙開発や原子力工学でアメリカをしばしば凌駕していたという科学史的事実を映し出している。そののち、ご案内の通り、ソ連崩壊とともに、ロシア語を学ぶ学生は潮が引くようにいなくなった。理系の学生をロシア語に惹きつけたのは、ロシア語運用能力が彼らにもたらすであろう学術上の、あるいは生活上の「利便性」、にべもない言い方をすれば「利益」であったから、その保証がなくなれば、ロシア語を習得する動機は消失する。一方、チェーホフやドストエフスキーを読むために露文に進む学生たちのロシア語学習動機は、東西冷戦構造や宇宙開発競争とはかかわりがない。

私たちに言えるのは、どの外国語を学習するかということと、学習者がどのような目標文化を標的にしているかということの間には一意的な相関はないということである。

私自身はまず英語と漢文を学び、それからフランス語を学び、少しだけヘブライ語を囓った。どれも中途半端に終わったが、それらの外国語を習得しようと決意して辞書や教則本を買い込んだときの浮き立つような気分は今でも忘れない。私の場合、それはいつも同じ気分だった。「今の自分が使っている言葉でしか思考できない、表現できない、対話できない」という息苦しさから離脱することを期待したのである。私はどこか他の種族の文化を血肉化したかったのではない。種族の文化そのものから離脱したかっ

たのである。「こことは違う場所、今とは違う時間、私とは別の人」に出会うことを切望していたのである。フランスの知識人たちの「知的饗宴」を欲望したのは、それが母語的現実から隔たること最も遠いものに思えたからである。

その後、私が母語的現実から少しでも身を引き剥がすことができたのかどうか、わからない。わかるのは、私が母語を含めてあらゆる言語の「不器用な遣い手」になってしまったということだけである。

――内田樹「日標文化をもたない言語」

（注）コロキアル　口語的。

（注）イノベーション　刷新。

（注）コイネー　紀元前五世紀ごろから西暦七世紀ごろまで東地中海地方の共通語として用いられた言語。現代ギリシャ語の祖。

（注）リンガ・フランカ　共通語。

問い　右の文章を要約しなさい（二〇〇字以内）。